

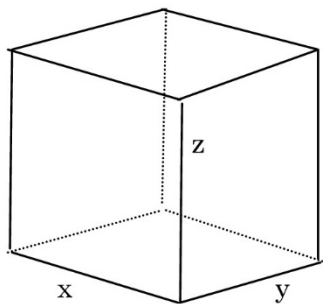
「吃音者宣言」の今ー「吃音者宣言」批判

大阪言友会「吃音と正しくつき合う吃音講座」テキスト批判

昨年手にしたこのテキストは、言友会の吃音ー吃音者観そして方向性について系統的に述べた初めての文書ともいえるべきもので、筆者のエネルギーのほとぼしりが感じられる文書です。そしてこの系統的な文書をもって、言友会の吃音者観の問題性その方向性の問題性が、私自身にも系統的に明らかになって来ました。そのことをそのころ出された「吃音を考える」1号への批判とともに書き記しておきたいと思います。

(一) ウェンデル・ジョンソンの言語関係図について

雑談的な話の仕方で敢えて進めれば、この「空間図」を見ていて最初に思ったのは、大学に入って教養の物理の授業で教師が最初に言った言葉を思い出していました。「高校時代までにならった物理のことを総て忘れてしまいなさい」ということだったのですが、そのことはその時には意味が分からなかったのですが、今になってやっと臆げながら分かったように思っています。それは物理学におけるパラドックス転換ということでしょうが、…。「空間図」の問題に引き寄せて言えば、このようなニュートン的な「絶対空間」的概念がひっくりかえされたのではないかと思います。



x 軸:話しことばの特徴

y 軸:聞き手の反応

z 軸:話し手の反応

さて、こんなことを問題にしているのは、ここであげている $x y z$ というのが、この関係図では、実体的な独立項として表現されているのですが、 $x y z$ ということによって表現されていること（関数の項的存在）の「相互」関係がむしろ問題なのだと思います。そして更に、この空間を固定的空間としておいているということが問題なのです。（だからニュートンの「絶対空間」という概念を持ち出しているのですが・・・。）そのことは、たとえば、よく持ち出される「アメリカ・インディアンのある部族の話」の場合は、そして吃音（者）に対する文化の違いによる許容度の違いは、この「空間図」ではどのように表現されるのか、ということで指摘しようと思います。

また y 軸ー（ジョンソンの表現では）その吃音者がとった行動に対する回りの人々の評価や反応ーへの働きかけを社会への働きかけとして表現している文がありますが、これは曲解ではないかと思うのです。敢えて「空間図」にのっかったところで表現すれば、その「空間」総体一場ということが、社会として表されるのではないのでしょうか？それを運動論的に表現すれば、例えば差別した個人に対する糾弾ということが y 軸への働き掛けとし

て表現しうること、社会を変えるといういみでの「社会に対する働きかけ」としては、これも「空間図」にのっかったところで表現すれば、「空間一場」自体を変えるということだと思います。

その辺の曲解は、(二)でも同様に示します。

(二) チャルズ・バンライパーの吃音方程式とその援用について

バンライパーの方程式に関しては、ジョンソンの関係図と同様、分母・分子が羅列してあるだけで、それぞれの関係性がむしろ問題であり、そのことが明らかにされていません。更に例えば士気を分母にしてあるのですが、これには首をかしげざるをえません。人によっては分子になるのではと思います。このことはいかにも西洋的な発想と言いえるのではないのでしょうか。

その援用としての言友会の吃音方程式になるともうメチャクチャです。その最も顕著なことが、罪と罰という項が消えていることです。罪というのは、罰に対応し単独で形成されるものではない、言わば物象化し内自有化したものであるということを押さえた上で、そ。が、これらは、社会学や心理学で問題になっている役割理論におけるサンクションの概念にフィットしている。すなわち吃音者の吃ってはいけないという意識の形成は、このサンクションを抜きにして考えられない。そもそも吃音自体が、このこと抜きにして存在しうるであろうか、という疑問さえ浮かび挙がる。それなのに、この項を切り捨てている。そして変わりに幾つかの項をほついている。これはいったいどういうことであろうか。それはジョンソンの関係図の概念をあえて援用するとy軸の項(厳密にいうと場そのもの)を切り捨て、z軸の項を切り捨てているのである。これはプロテクルスのベットである。

(説明) プロテクルスのベットとは

(三) 吃音者宣言の治療者に対する批判—オプティズムとベシズム

「吃音者宣言」の「治療者」への批判は、実際の効果よりも過大報告しているということと、事後調査の結果を押さえていないということであろう。だが、これは「吃音者宣言」の生き方論についても同じことが言える。例えば「吃音者宣言」的な生き方をつかんだと思われた人が、又前と同じとらわれに悩んでいたり、後で民間の治療所に通っているという話を聞いたりする。そして吃音を克服したと言われる人、吃音者宣言的な生き方を吃音者宣言と離れて実行している問われる人が、その内面をとらえると、吃音者としての問題をひきづっているということを私はたびたびとらえることができる。田中、父、相川。

治療者への批判「このようなスピーチの練習をして、その子がどうなるかという見通しがないのに、ひょっとしたらうまくいくかもしれないからやってみましょう、という見通しのない指導をしてはいけません」(「吃音を考える」1号)という批判は、テキストの「また自分が一度の失敗によって想像していた周囲の人の反応が、実はその人その時だけのものであり、次の機会には全く違った反応が返ってくるかもしれない。自らが動き始めなければ、何事も起こらない。」という文にそっくり向けられるのではないか。吃音者宣言の冒頭ののぶん「どもりは悪いもの、劣ったものとして」ということは、ぼんつう的意識とし

であり、たしかに個々によって反応が違ってくるにせよ。「その人その時だけのものであり」などとけつして言えないことは、我々自身が自らのつうくな体験によって知っているはずではないだろうか。

伊藤氏はx軸の働き掛けに関しては、ペシミストであり、z軸の働き掛けに関しては、オプティミストである。逆に望月氏はx軸の働き掛けに関してはオプティミストであり、z軸の働き掛けに関してはペシミストである。

以前、私は望月氏の金閣寺の「放火事件」に関する論功をよんだことがある。そこ文を読んで驚いた、以外に感じたのは。望月が「放火犯」の吃音者にたいしてその受けた被差別の傷みに対する共感ということを示されていることである。いっほう言友会の数少ないy軸への働き掛けの一つである。九州言友会の抗議文は逆に「犯人」の吃音者から吃音者一般を演繹判断するなといって、その吃音者に対する被差別の共感をもとうとはしない。なぜこのようなことがおきるのか、それは吃音者宣言が「上」をみて、「下」を見ようとしていないからではないだろうか。

勿論、伊藤の「治療者」に対する反発の底には「どもりは悪いもの、劣ったもの」という捕らえ方に対する反発、そして治療という行為がその見方を固定化するというところでの反発を読み取ることが出来る。しかし彼はそのことを方針化し、行動に移そうとはしない。その根拠は「困難である」という判断である。それは吃音者の障害者規定を巡る論議でも出てくる。いわく「」ではそもそも吃音者宣言を言友会に定着させることは「困難」ではないだろうか。（言友会のもんをたたく8割以上は治すことを求めてくる。）国際大会を開くことは困難ではなかったのだろうか。

先ほど述べたオ、ペというのは、運命論的な発想なのである、それは社会の変革を放棄し社会を固定化してとらえることからきているのではないだろうか。会のy軸への働きかけはあると反論されるかもしれない。だがそれは、啓蒙でしかない啓蒙とは偏見にたいしては有効であるかもしれない。だが、吃音者の問題は偏見ではない、社会に価値感に根差している。だからそれは場ということの問題にしなければならない。それはyとして表現されるものではなく、あえてジの関係図を援用して述べるならば、空間素の物をx y z 総体として変革することである。それは確かに困難な事業に違い内、が凶事的、通じてき共同作業として、難渋年、難百年懸かろうとも、吃音者の今と、未来を切り開く長逝としてふみこむべきではないだろうか。段階論。

（四）吃音者宣言と治す努力の否定

「治す努力の否定」は吃音者宣言がでるまえの全言連の「機関紙」「ことばのリズム」の特集のテーマだったのですが、吃音者宣言の文面からは消えています。「治す努力の否定」という表現自体が、表現しようということに該説であるのか、また微妙ににゅあんすが時と場合で、変わっているので分かりにくいのですが、私なりの解釈を述べて、その問題点を指摘しておきたいと思います。

「治す努力の否定」という場合には、「吃音が治るか治らないか」という論議の中でその

論議に巻き込まれているのですが、結局は、吃音には百パーセントの治療法はない。治る場合も希にはあるが圧倒的に少ない。そして治そうと思って努力しても、治らない場合がほとんどである。それにそのために労を尽くし、また治すことに執着し、今を生きえていないことがある。一方で、吃音者でも吃音ということにとらわれなくて、生き生きと生きている人がある。そういう生きかたが気持ちの切り替えでできるのではないかと、そしてそのことによって回りの人の対応がかわるのではないかねということではないかとおもいます。

さて私はかつて吃音者宣言をよんで、有る団体の方向性との類似点を感じました。それは「精神秒」者集団の主張ですが、彼らの場合も「治す努力の否定」を打ち出しています。だが根本的な違いがあります。それを以前単純明解に言友会は「治らないから治す努力の否定」病者集団は「治るけれども治す努力の否定」という表現をしましたが、かえって分かりにくくなったようです。

厳密にいうと言友会は「治らないものとして治す努力の否定」で、病者の方も治すことを一般的に否定したわけではなく、「治すことを強制されることの否定」だと思います。薬の問題・・・。

言葉の遊び的になってしまっているのですが、問題の根本は、スティグマということの問題にしているのか、どうかということです。それは障害個性論を巡っての問題で明らかにしうと思います。言友会は障害個性論をほとんど一公式には取っていません。そして障害個性論をとったとしても、「人は短所も含めて人である」という論理で、スティグマ性自体を問題にしえていません。そのことは「個性と能力を生かし」という能力主義につづいていしています。そもそも能力とは何か、ということが問題なのです。

現在の、障害者運動は、病者だけではなく、そのような鋭い掘り下げにはいつています。言友会はそのような掘り下げがないので、相変わらず「治るか治らないか」という論議に捕らわれてしまうのではないのでしょうか。たしかにそこにマージナルな一にいる、吃音者の特殊性の問題はあるのですが・・・。

(五)「療法」の援用と選択科目

さて、言友会の全国大会はいま、ワークという形で、いろいろの療法を取り入れています。私は最初そのことを吃音者宣言を浸透させるための方便と思っていました。が、どうもそうではないようです。問題は、そこにおける吃音者観の問題まで及んでいる様です。吃音者にたいして、とりわけ言友会にくる吃音者に対して「精神療法」の必要な人達という偏見があるのではと思っています。そしてそのことは吃音の問題での「治す努力の否定」と言いつつ、他の人の「治す努力の否定」を問題に為しえていないのです。「療法」とはとりも治さず、病者への「療法」なのではないのでしょうか、そのようなことを言友会の中に援用しようとするもののなかには「精神鎮」を「悪いこと、劣ったこと」という価値感にとらわれているのではないのでしょうか。

さらにその内容のメチャメチャさ。KJ法
個々の「療法」

これらの「療法」を一般的な自分を知るといふことの面白さ、といふことで設定しようといふ寒がえもみうけられるのですが、この場合はその他の「表現読み」、文書教室とかいふことと同じで、色々の趣味の問題、「選択課目」的こととしてあるのではと私は捕らえています。そのようなことを手を換え品を換えつぎづきに例会の場に連続的にしかも一様「けいとうだてて」行ったり、全国大会の場もそのような「選択課目」を実演したりすることに私は疑問を抱いています。

指導といふこと。

（六）まとめ

少し前に言友会の古い文書に目を通していたら、「愛される吃音者」になろうといふ、言葉が目に留まりました。これは黒人解放闘争のなかで言われている「アंकルトム」の話しをそうきさせます。はつきりいえば奴隷根性です。「黒人は生まれながらに奴隷なのではない、関係性の中で奴隷となる。」「女は・・・」といふことと吃音者の問題は相通じていると思います。それは一言でいえば、「差別むといふことなのですが、この言葉ほどかなり使われながら、中身がにつめられていない言葉はないと言えるのではないのでしょうか。これについては、「差別」という言葉がきよくかいされている現実、タブー化している現実から問題にしていかなければならないし、とても一言では述べえないので、この「吃屹」で除除に書いて行きたいと思います。「吃音者宣言」の現実的な運動は結局このことを脱しえていないのではないのでしょうか。「吃りを治す」といふことから「自分の性格を換える」といふことに変わっただけで、吃音者の問題を結局個の問題にすり替え、「自分を換える」といふことにとらわれ続けているし、自分が変わることにによって他者を換えることができるという「幻想」にとらわれているのです。

「どもりは悪いこと、おとたこと」といふ考えがほんつうてきにあるといふ現実から目をそらしてはいけないし、なぜあるのかを問題にする必要があるのではと思っています。

「吃音学を超えて」を書いた相沢さんは「吃音者宣言」を「トラジ・コメディ」と書いているのは、この「幻想」ととらわれている様をいっているのではないかと思います。彼の障害者寒吃音者寒には賛同できないけれども、その指摘は当たっていると思っています。